

ライフ・スクリプト関係の一連の研究報告の序説

清泉女学院大学 東 洋

発達研究の本号の論文中、柿沼・上村論文、上原論文、高崎論文、唐沢論文は、昨年度の19号の向田、柿沼、上原論文とともに、私が研究代表者となって日本学術振興会の科学研究費補助金、発達科学研究教育センター委託研究費によりおこなっている、ライフ・スクリプトに関する日、中、米、比較研究プロジェクトから生まれたものなので、共通する主題について若干の説明を加えたい。

ライフ・スクリプトとは、日常的、生活的な出来事の進行経過に関する常識的な筋書きの知識である。筆者がまだそのように名付けないままにこのテーマに関心を持つに至ったのは、ほぼ20年前、道徳判断の日米比較研究をおこなったのがきっかけであった。行為の道徳的判断を行なう時、判断者は多かれ少なかれその行為がどうして生じ、どのような経過で進行したかについて、与えられた情報に推測も加えてひとつの短い物語を創成する。その物語が判断の基礎となり、同一の行為に対する道徳的判断の日米間の相違には、創成する物語語の差異による側面があると考えた(Azuma 2001)。物語の創成には文化的に形成されたスクリプトが枠組みないしガイドラインになると考えられるので、より一般的にライフ・スクリプトの文化間比較を発想したのがきっかけである。

最近、脳生理心理学や進化心理学などが、それぞれの生物科学的研究の進歩を背景に急速に発展し、心理的な発達の研究にも多くの影響と刺激を与えている。行動も認知もすべて、脳内または神経系内の生物学・生理学的な過程を介して成り立っていることはいうまでもないので、これは当然な事である。

だが、心の発達は、生物学的な過程に担われるには違いないが、同時にすぐれて文化的な事象である。心の内容は、言語や習慣はもとより、知識も思考も意識も感情も、あらかじめ文化によって形成され、かつそれ自体が文化を構成するものでもある。発達心理学は、「文化が心を作る」過程に、またさらに「心が文化を構成する」過程にふみこまなければ存立し得ないと筆者は考える。

文化と心のかかわりについては、文化人類学の研究がすでに20世紀初頭以来、観察と理論化を重ねて来た。その刺激で、心理学の世界でも比較文化心理学が台頭し、異文化圏間の心理学的な比較を、主としてサイコメトリックな測度によりおこなうようになった。そしてその限りにおける文化圏間の差異の存在が数多く報告された。けれどもなぜ、どのようにその差異が形成されたかと言う事になると、単純なサイコメトリック研究では推測の域に留まらざるを得ない。文化と心の形成関係の実証的研究はとなると、容易ではない。人の心も文化の一部を形成しており、文化全体と有機的に関連しているので、文化と心の関係は相互形成的であり、一方を条件に、一方をその結果としての従属変数にみならず古典的実験心理学の図式には簡単にはのせられない。その上、文化は、人が作り上げた有形無形の人工物の総体であり、その内、ひとりひとりの心理的形成に直接関わるのはその総体ではなく、そこからサンプルアウトされた一部、しかも人毎に異なる一部である。「文化」に対する「心理」と言うように大掴みなカテゴリーわけで対置して大数処理する従前のサイコメトリックモデルは、この相互生成的なすがたを捨象してしまうという限界がある。例えば日本文化、若者文化、或いは仏教文

化をそれぞれひとまとまりの固い組織体のようにみなして、心の形成を規定する独立変数として扱うのは、文化をステレオタイプ化し、そのステレオタイプに個人をおしこむことになる。それはこのグローバル化の進む時代に、いかにも無理な概括である。文化は（そして心理学も）、比較的粘性の強い流動体と見るべきではないだろうか。

一方、古典的実験心理学の方法に対し、発達心理学においては縦断研究の伝統がある。20 世紀なかばまでの縦断研究は、発達を時間（年齢）の関数としてみる傾向が強かったが、過去 20 年ほどの間には、育児の問題もふくめ文化の中での精神発達を地道に記述的に扱う研究も勢いを得て来た。これは、文化の影響を個人と言う着重点にしぼって示すもので、上記の「無理な概括」は避け得る事になる。けれども成育史とそのそれぞれの時点での文化環境をあわせてくわしく記述するのはきわめて労の多い仕事で、かつ完了までに年数がかかるので、多くの大規模な野心的研究プロジェクトが、研究の途中でその担い手や理論的枠組みに変化が生じてしまい、膨大な資料が単なる記述の水準で残される例が少なくない。そして情報が多すぎるので因果関係を捉えるのが困難でしかもそこから得られる知見の一般化可能性の範囲は明確にし難いことになる。

筆者は、文化を固く先験的な、個人を超越する所与条件と見なして文化圏間のサイコメトリックな比較をするのがステレオタイプ化の危険をはらむことは認めるが、非拘束的で境界が曖昧な形においてだが、文化圏というべき集団文化が存在する事もまた否定しがたいことなので、それを無視することは無用な迂回であると考え。ただ、意味のある集団は一定の文化的経験を共有することで定義されるべきだと考える。その集団に属する個人の多くが共有する文化経験が存在し、むしろ文化経験の共有が集団の凝集性の基盤になっているとも言える場合も少なくない。その意味での集団文化圏の差異が精神形成に及ぼす影響を見るのは、文化的ステレオタイプ化を意味するわけではない。Elder の「大恐慌の子供達」研究が、一定の文化状況を体験したこどもグループとそうでなかったグループとして文化環境の一切片の共有を指標に集団を規定し、多面的に追跡調査したのはその一例である。しかし大恐慌のような事件は特殊な事件である。われわれが当面国間比較から研究をすすめるのは、今の世界的政情のもとでは、国がしばしば異なった文化的経験のプールだからである。たとえば日本とアメリカ合衆国（以下米国と略す）と中国では、国単位で教育制度が異なり、教育方法、内容も異なるし、職業的選抜の仕組みも異なる。勿論それぞれの中で階層差、地域差、そして勿論個人差もあり、一様ではないのだが、三国の間で成育途上の国民が経験する文化の分布にはっきりした差異が生じるのは自明である。

とはいえ、大きく網を打つように三国の文化を比較したり、心理を比較したりするのは、出来ないことであるばかりでなく短絡的な結び付けになる可能性をはらむ。われわれが課題をライフ・スクリプトという、文化の一切片にしぼったのは、その形成にかかわる文化的要因が推定しやすく、またそれが日常生活的な事象の認知、記述、判断などの心理的活動に大きく影響する事もまた容易に推定できるからである。

仮説として、日常文化経験からライフスクリプトが形成されるので、文化圏内ではライフスクリプトが共有される傾向があり文化圏間ではその分布が異なるはずであり、厚く分布しているという意味で起動されやすいスクリプトの、文化圏間での統計的差異が、国などの集団的な水準での社会的認識

の食い違いの一因となっていると考えた。現在のプロジェクトは、その検証の一部として企画された。当面の課題は、日常的な行動や出来事の記述のスクリプト、つまりライフ・スクリプトの集団間比較を行ない、さらに、それとそれぞれの幼児期、児童期に経験する物語のスクリプトの差異との対応が見られるかを否かを検することである。

ライフ・スクリプトの同定の為には、日常生活的な出来事の記述にあたって、どう言う事項が記述されるべきだと考えられているかを、自分の経験、将来予想、他人についての記述の重点事項、人事的な出来事の記述についての文章完成などをこころみた。あわせて、ライフスクリプトの原型を提供すると考えられる、幼児・児童期に経験する物語として、母親の語り聞かせや、教師の対応、読書材についての調査を行なう事にした。また、文化圏としては、単純な2分法への誘惑をさけるため2文化圏の比較にとどまらず、可能な限り日、米、中の3文化圏間を比較する事にした。その諸研究のうち、最近にまとめられ、それ自身で独立して報告し得ると考える部分を本号に掲載する次第となった。プロジェクト全体のまとめと結論には、この一年の間に到達したいと考えている。